

アルヴァ・アアルトの建築の実地調査及び 図面資料収集



総合生存学館 1 年
山城 一平
フィンランド
2016 年 8 月 28 日～
2016 年 9 月 19 日

渡航概要と内容

今回の渡航では、ヘルシンキ、ポリ、タンペレ、ユヴァスキュラ、セイナヨキ、イマトラの 6 都市及びその周辺の地域に滞在し、アルヴァ・アアルトの建築の調査及び図面資料、書籍資料の収集を行った。帰国後もアルヴァ・アアルトの建造物保存に関するシンポジウムがあり、併せて参加した。訪れた建築は 70 件程度、収集した図面資料は 370 点程度である。現地ではアアルトな主要な建築を訪問し、撮影、実測調査及び管理者に話を伺い、アルヴァ・アアルト財団が主催する様々な建築のガイドツアーにも適宜参加した。ユヴァスキュラでは財団が管理しているアルヴァ・アアルト・アーカイブと呼ばれる図面資料のアーカイブを閲覧し、論文作成に必要な図面資料と書籍を収集した。さらにはアルヴァ・アアルト財団・美術館館長のトンミ・リンダ氏、ユヴァスキュラ都市計画責任者・フィンランド建築デザイン協会副会長のレーナ・ロッシ氏にアアルトに関する近年の研究動向について、また自身の研究内容について話を伺い、今後の研究の指針を得ることができた。

渡航を通じて感じたこと

申請者はこれまで、「北欧の風土に根ざした建築」というかたちで理解されることが多かったアアルトの建築を、「相反する要素の統合」という異なった観点から捉え直すことを試みてきたが、今回、新たに手に入った図面資料や、実際の建築を観察する中で、アアルトの建築において、様々な対立要素がスケールとディテールを変えながら繰り返し登場する様子を確認することができ、対立物の統合の問題に関して、アアルトが意識的であることに対してある程度の確信をもつことができた。アアルトにおける対立要素の問題はこれまで断片的には言及されてきているものの、学説として定着するには至っていないとのこと

であったので、アアルトにおける対立物とは具体的に何を指すのか、対立物を統合することが建築設計においてなぜ重要となるのか等、今後、理論をさらに精緻化して行きたい。

今回の経験をどのように今後生かしていくか

今回の渡航で得られた写真、図面、書籍等の資料は、論文を投稿する際の資料として使用する予定である。また今回アアルト財団館長のトンミ・リンダ氏に話を伺うなかで、Alvar Aalto Researcher's Network という研究者のネットワークを紹介していただき、研究動向等の情報を得られるようになった。自身の論文に関しても財団に送付すれば一読いただけるとのことであったので、国内学会で論文が採択された際には併せて財団にも送付するよう予定している。財団はアアルトに関する独自のジャーナルも発行しているため、未発表の内容を投稿することも勘案しながら、対外的な発表の成果に結びつけていきたいと考えている。

主な奨学金の使途

- *渡航費
- *海外旅行保険料
- *移動費
- *宿泊費
- *資料・現地活動費 など